
双子の兄が歩く道～ネギま！～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の兄が歩く道／ネギま！／

【Nコード】

N6336Z

【作者名】

十六夜哀音

【あらすじ】

ネギま好きだった俺はいつの間にか転生していた・・・
死んだ記憶はないし、テンプレした記憶も無い。だっていうのに赤ん坊！？

もう1人の赤ん坊は・・・ネギ・スプリングフィールド？

どうやら俺は双子の兄だそうだ・・・何故兄がネギじゃない！！
似非敬語で素を隠しながらネギま！を辿る？物語が今始まる・・・

この物語は残酷な表現・アンチ？・ガールズラブ？等が含まれる可能性があるのでご注意下さい。

尚、更新は不定期・PCからの閲覧を推奨します。

1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

1 歩目は前作と同じです。

改行を増やしてみたのですがいかがでしょうか？

初めて読んでくださる方はこのままお読みいただけると嬉しいです。

1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

目の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。

辺りを炎に包んだ元凶は既に目の前にいる男に殲滅された。

地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まった女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。

俺と子供目の前には元凶を殲滅した男がローブを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。

その男は俺たちの方へと動き出す。

「お前達・・・そうかお前達が・・・お姉ちゃんを守っているつもりか？」

もう1人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。

俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。

そう知っていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。

「大きくなったな・・・お、そうだお前達に・・・この杖をやるう。俺の形見だ・・・一本しかねえけどな・・・」

そう言って、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取

った俺はすぐに弟へと杖を手渡した。

「お父さん・・・？」

そんな男の姿に弟は呟くが、俺から手渡された杖が重かったのだからバランスを崩す。

「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆっくり治してもらえ。悪いな、お前達には何もしてやれなくて・・・」

男はそう言いながら空に浮かぶ。

「・・・お父さん？」

「こんなこと言えた義理じゃねえが・・・元気に育て、幸せになー！」

彼は何を想って此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。

そして飛び去る男の背中を「お父さん！！」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた！だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

ここはメルディアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。

今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。

そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド、つまりはネギの双子の兄である。

何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になっていないのか不明ではあるが、推察するに俺が転生者であることが原因ではないかと考えている。

俺は自称『転生者』である。何故自称かと問われれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解^{チート}不能能力をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。

要するに、現実^{前世}で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。

紛れ込んだといっても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・

『現実』の記憶を持っているが、『物語』の中に存在する身体であるアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギが主役の^作世界に居続ける、夢から覚めない^{現実に戻らない}のであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。

さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼の『千の呪文の魔法使い』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。

更にはこの七年間で、弟と禁書庫に籠ることで『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳才能や開発力を持っていると考えられる。

そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかつたりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしないが覚えてはいる。

これらの事から、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。

因みに『現実』ではそんなに料理をしなかったのに、この歳でかなり美味しい料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲・ある程度の体術が使えるようになっていたりもした。

これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。

どこことなくそんな人物を『現実』の別の物語作品で見たことがあるような気もするのだが・・・

そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。

「・・・ク君！・・・アルク君！アルク・スプリングフィールド君！」

「・・・ハイ？」

「全く、君はまた考え事をしていたのかね？卒業式だということに変わらないの・・・」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニヤは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこちらを見ていた。

どうやら校長に何度も名前を呼ばれていたらしい。

考え事をしているとどうにも周囲の音が脳に入ってこなくなってしまうのは悪い癖である。

卒業式という長いようで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが・・・

ようやく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取った。

そして、俺達の卒業式は終わりを迎えた。

ネギ・アーニヤと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。

卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認であろつ。

アーニヤはロンドンで占い師、ネギは日本で先生をすることであるう。

恐らくは俺も『英雄の息子』という名のネームバリューを持っていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであろう。

「ネギ、アルク2人共何てかいてあった？私はロンドンで占い師よ」
案の定アーニヤはロンドンで占い師であった。

「今浮かび上がるところ・・・お？」

ネギがアーニヤに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。

俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がってくる。

『A T E A C H E R I N J A P A N（日本で先生をすること）』

それと同時にネカネさんとアーニヤ2人の「ええ~~~~~~~~」
~~~~~!？」絶叫が廊下に響き渡る。

そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニヤ

「何かのマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です」

「そうよネギったらただでさえチビでボケで・・・」

確かにどう足掻いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良ならなんとかなるだろうというか何とかなってしまうと思いつつ

「ああ、ネギも日本で先生をすることだったんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒の場所で修行するのもかもしれないね」

と俺が発言するとネカネさんとアーニヤが若干だが大人しくなった。前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。

まあ中身が『一子供におじさんと呼ばれる年齢《ハタチ過ぎ》』 + の年齢なのだからできないこともない。

ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかったりすることとかだ。

魔法を使えば出来ることではあるだろうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだろう。

そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニヤからは特に心配されることもない。

実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引っ張られているかのごとく稀にわがまを言ってしまうこともあった。

しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尚も校長に無理だと主張を続ける2人が

居た。

「卒業証書にそうかいてあるのなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

ネカネさんとアーニヤの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまった。

そして

「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

と言っ言葉が続いた。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと啞然として立っているだけのアーニヤ、そして倒れたネカネさん。

そんな光景が俺の目の前に広がっていた。

ネカネさんも大変だなあ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺であつた。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしていた。

今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。

と言つのも、座学の成績は兄弟ともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意とする属性の魔法を使っていたため、ネギ

が主席で俺が次席という扱いになっている。

俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジェリンとほぼ一緒の得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。

これは今後の布石である。

俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。

しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。

そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでM<sup>双等</sup>M元老院や学園<sup>ぬらひ</sup>長の目をネギに注目させることにしたのである。

ある種の生贄ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思っていたりもする。

が、結局主席・次席なので優秀な英雄<sup>手駒</sup>の息子達として目をつけられているかもしれないが・・・

因みに兄弟仲は良好である。

ネギの千<sup>父</sup>の呪文の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるように思えるが、年齢や環境から考察すると致し方ないものであると捉えることができる。

幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯（叔）父・伯（叔）母に預けられて生活していれば尚のこと、離れで子供二人で暮らし

ているということもかなり影響しているだろう。

そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかった上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかつたことも影響しているであろう。

総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。

あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？

等とは言ってみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるということを経験させてやるだけでもいいのだから。

まあ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その思いが子に届いていなければ無意味なんだ。

そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思っている。

そういえば、ネギはやけに父にご執心だが母について気にしていないのは何故だろう？

先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になって面倒を見てくれたからであろうか？

そのあたりは追々考えて行くことにしよう。

それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使いになりたいと公言していることも上げられる。

俺自身は『立派な魔法使い』<sup>マギステル・マギ</sup>になりたいと思っていないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている・・・つもりである。

これのお陰で、ネギも俺が千の呪文の魔法使いのような立派な魔法使いになりたいものだ<sup>父</sup>と認識してくれているようでやりやすい。

そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業することが出来たのである。

気がつくくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることにした。

・・・さて、次は日本での目標を考えよう。

麻帆良到着後のイベントを大きくわけると

- 1 ・ 学年末テスト
  - 2 ・ 桜通りの吸血鬼
  - 3 ・ 修学旅行
  - 4 ・ 悪魔襲来
  - 5 ・ 学園祭
  - 6 ・ 魔法世界
- この6つとなる。

とりわけ原作<sup>介入</sup>ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァンジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろ

う。

俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジェリンがすきなんだよ・・・

ハーレムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・  
・

まあ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否めないわけだが・・・

方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないようにフォローしていくこととする。

好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺が主<sup>新し</sup>い物語の世界になるかもしれない。

その時は、ネギと一緒に俺も成長していけばいいかと考えている。

今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。

そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニヤとネカネさんに見送られてウェー  
ルズをあとにした。

懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立ったのである。



## 1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

一読戴き、気に入っていただければ幸いです。

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただくと嬉しいですよ。

5000字〜10000字を目安に作成していきたいと思っています。

R-15 ガールズラブ 残酷な描写タグについては自身の物差と他の方の物差の差を考えて保険としてつけています。

設定小話1主人公の名前の由来・・・

ネギはナギの母音を変えたただだったので、アリカの母音を変えて名前をつけようとしたが、アルカとかアリクとかアリスとか残念だったり女の子のような名前ばかり出てきてしまったので、取りあえず『ア』をつけようと思ったら、アルクという名前になりました。

『ア』をつける アルクだ！という思考回路は意味不明なところがあります、決まったんだしいかな・・・と。

こんな感じです。

今後幾話かはこんな設定小話なども掲載していく予定ですでお付き合いただければ嬉しいです。

前作に引き続き読んでくださった方、ありがとうございます。

初めて読んでいただいた方、初めまして。

これからも、この力キモノにお付き合いいただければ嬉しいです。

2 歩目〓日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く〓（前書き）

大幅修正2 歩目です。

前2 歩目は日本到着〓歓迎会終了でしたが、

現2 歩目は麻帆良行き車両内〓学園長室退室までです。

## 2 歩目〱日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く〱

早朝に日本に到着し、電車で麻帆良学園都市中央駅を目差す。

何度か乗り継ぎ、埼京線の電車に乗った辺りから学生達の登校時間と重なったらしく、電車にはどんどん学生が乗り込んできた。

そうこうしているうちに、満員になりギュウギュウと押しつぶされる俺とネギの姿がそこにはあった。

「ネギ、そっちは大丈夫かい？」

「うん、だ、大丈夫だよアルク・・・」

俺は『現実』での経験から平然としていたが、生まれてから今までウェールズで育ったネギにはキツそうである。

「本当に大丈夫かい？ほら、隙間作ったからこっちにおいで。」

本来ならば女性にしてあげることなのだが、ネギがあまりにも不憫なので隙間を作って入れてやった。

気がつくと、車両の中が俺達兄弟を除いて少女達ばかりになっていた。

曲がりなりにも俺達は日本人から見ると外国人にあたるので、どうにも好奇の目を向けられてしまう。

「僕達どこ行くの？ここから先は中学高校だよ？」

少女達は小学生程の身長しかない俺達がどこに行くのか気になる様子でそんな事をたずねて来た。

「いえ、その・・・ハ、ハックシユン！」

ネギがくしゃみをすると同時につむじ風が巻き起こり、スカートがめくれる。

それと同時に『次は、麻帆良学園、麻帆良学園中央でございます』日本の電車特有の鼻声アナウンスが流れる。

このアナウンスを聞くと、嗚呼、日本に帰ってきたな・・・と思えてしまうのは気のせいだろうか？

しかし、魔法学校時代から魔力の制御について直せと言ってはいるのだが、どうにも直してくれないのは何故だろうか？

電車を降りて、改札から出ると電車内以上に学生の山が見えた。

「わわわ・・・何コレ！？スゴイ人！これが日本の・・・」

「ここは日本の学校の中でも特殊だからね？日本の他の学校も毎朝こんな事になることはない・・・みたいだよ？」

ネギが勘違いしそうだったので訂正しておくが、理解してくれただろうか？

「あーアルク、僕達も遅刻する時間だよ！？初日から遅れたらまずいい、早く行こう！」

その瞬間、高校生顔負けの速度で走りだすネギの背を目に、あの日を思い出しながら追いかけた。

ただし、俺は身体強化の魔法を使っていないのでネギのようなスピードで走ることはできないし、する気もないのであるが。

ちなみに、ネギはリュックを背負っているが『物語』のようにガチャガチャ音がなるようなものは入れさせていない。

父の形見である杖だけではどうしても譲ってもらえずに此方が折れた。他の荷物については友人であるタカミチ宅に届くように既に配送済みなので、後日取りに行くだけである。

やっとネギに追いつくと、赤い髪をツインテールにした少女『神楽坂明日菜』にアイアンクロウをされていて、その傍らには長い艶やかな黒髪の少女『近衛木乃香』が立っていた。

「ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア初等部は前の駅やよ？」

「そう、つまり子供は入ってきちゃいけないの、わかった？」

「は、放してください……」

このか、アスナ、ネギである。

どうやら俺のことには気がついていないようなのでこちらから声を掛けることにした。

「弟が何かしましたでしょうか？したようでしたら私も謝りますので一度弟を放してはくれませんか、御姐さん。」

「あ、アルク！助けて！」

「え？うわ、子供がもう1人増えてる・・・」

「僕達どないしたん？もしかしてここに何か用事でもあるん？」

「ええ、私とそちらの弟なんです、本日よりこの学校の英語科教師として赴任してきたアルク・スプリングフィールドと、そちらの御姐さんが頭を掴んでいるのがネギ・スプリングフィールドと申しまして・・・」「え・・・ええー！！！！？」・・・コホン、学園長室に行きたいのですがどのように行けばいいのでしょうか？」

このかの質問に答えたら、アスナに途中で遮られたが驚くのも無理はないので気にしないことにする。

「ほえー？じゃあ君と今アスナが掴んでるネギ君がうちが迎えに行く予定やった新任教師さんなんやなー」

「そうだよーこのか君。」

このかの言葉に答えた声の方を見ると俺達兄弟の友達であるタカミチが来ていた。

「お、おはようございます！高畑先生！！」

タカミチに挨拶をすると同時にアイアンクローを外してネギが落ち

た。意識が落ちた訳ではない。

「久しぶりタカミチー！」

「久しぶりですね、タカミチ・・・いや、高畑先生と言った方がいいでしょうか？」

「・・・！？し、知り合い・・・！？」

「ええ、高畑先生が父の後輩だったらしく、その繋がりでお世話になりました・・・年齢は離れていますけど友人としてもお世話になっていますよ。ハハハ・・・」

「そ、そうなのね・・・ってそんな事より！先生ってどーいうこと！？あんたらみたいなガキンチョがー！！」

アスナにガキンチョ扱いされた俺は若干凹んだ。

「いや、その2人とも頭はいいんだ、安心したまえ。それと今日から僕に代わって君達2-Aの担任・担任補佐になってくれるそうだよ」

「そ、そんなあ・・・そっちの子はまだしも、こんな子イヤです。さっきだって・・・いきなり失恋・・・じゃなくて失礼な言葉を私に・・・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言っなー！大体あたしはガキがキライなのよ！あんたみたいは無神経でチビでマメでミジンコで・・・」

そこまでアスナが言うと、ネギが盛大にくしゃみをしてアスナの制服を吹き飛ばした。

俺はそつと自分の着ていたコートを羽織らせたのであった。

ちなみにアスナは『物語』の通りクマぱんを穿いていた。

このかにアスナが着れるものを持って来てもらい、アスナが着替えている間にアスナに何を言ったのかネギに聞いてみると

「あの人失恋の相が出たから教えてあげただけど・・・そして何故か怒ってあんなことされたんだよ。」

これまた『物語』通りではあるが、やはり育った環境が悪かったのであろう、これから俺が正しい方向へと導いてやらないと不味いな・

「女の人には優しくしなさいってネカネ姉さんに言われただろう？ネギは親切にしたつもりかもしれないけど、女性にとって恋愛に關しての悪い結果を教えるのは失礼なことだから次からは気をつけようね？」

「そうなんだ・・・わかったよアルク・・・」

こういった事なら素直に言うことを聞いてくれるのだが

「それと、魔力の制御はまだできてないのかな？あれも直したほう



「がいいと思うんだけど・・・」

「む・・・わかったわかった、それもやっておくから・・・」

魔法関係の話をするとどうにも聞き分けが悪い。

「ところで高畑先生、僕達の送った荷物は届いてますか？」

「ああ、ちゃんと届いているよ。後で持っていこうか？」

「そうですね、高畑先生の都合が良ければお願いしたいですね。」

「ハハハ・・・アルク君、タカミチって呼んでくれてもいいんだけどね・・・」

「一応先生をやるんですし、早めに慣れておいた方がいいんですよ。こついうのは・・・そうだネギ、これからはタカミチを見かけても先生をつけて呼ぶんだよ？間違っても生徒達の前、特に学校内では呼び捨てにしちゃだめだよ。」

「うん、次から気をつけるよアルク。」

そこへ着替えたアスナとこのかが戻って来たのでタカミチと別れて学園長室へと向かった。

学園長室に入ると学園長ぬらりひょんがいた。

『現実』で『物語』を読んでいた時はあまり気にすることも無かったが、実際に目の当たりにすると『ぬらりひょん』と言う言葉が非常にしっくりくる。

アスナはアスナですぐさま困った顔で『ぬらりひょん』を問いただしていた。

「学園長先生！一体どうということなんですか！？」

「まあまあ、アスナちゃんや・・・なるほど、修行のために日本で学校の先生を・・・そりやまた大変な課題をもちつたのー」

「は、はい、よろしく願います」

今現在、『ぬらりひょん』への対応はネギに任せている。

ここで、ネギに対応を任せているのは『物語』の通りに進行させていからである。

ただ、アスナをスルーした上、修行の話をするとは何事かと・・・まあ修行の話だけでは魔法に辿り付くなんてことはないであろうから問題はなさそうではあるが。

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう？今日から3月までじゃが・・・もちろんネギ君とアルク君の2人ともじゃよ？」

俺もネギも教育実習をする為の日本のカリキュラムは準備期間に受けておいたので抜かりは無い。

「ところでネギ君がアルク君には彼女おるのか？どーじゃな？うちの孫娘<sup>このか</sup>なぞ」

「ややわじいちゃん」

「ちょ、ちょっと待ってくださいってば！だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！しかもうちの担任だなんて・・・」

確かに日本では、子供が先生をするなどといったことは無いに等しいであろう。

「アスナさん・・・でしたっけ？一応私も弟もオックスフォード大学を卒業していますし、日本で教育実習をする為の単位も取得していますので出来ないということは無いかと思います。労働基準法でしたっけ？それについては調べていないので詳しくはわかりませんけど。」

これは準備期間中に言われたことなのであるが、俺もネギもアーニヤもオックスフォード大学を卒業したことになっている。

推測するにこの世界では、メルディアナ魔法学校はオックスフォード大学の隠されたカレッジでありメルディアナ魔法学校を卒業した生徒全員が表の世界で有名であるオックスフォードの名前を使い、裏の世界であればメルディアナの名前を使うのであろう。

もちろん、オックスフォード大学の卒業証書も貰っている。

あくまで推論であつてもしかしたら、貰った卒業証書は偽造の可能性も残っているのだが・・・

考えて見ると、偽造の可能性のほうが高いような気がしてきたぞ・・・？

経歴詐称なんかで捕まったりしたくないのだが・・・

・・・そういえばここは麻帆良であることを忘れていた。

アスナがネギや俺のような子供が先生をするのはおかしいと思ってるのは、麻帆良の認識阻害結界を『魔法完全無効化』マジックキャンセラーで無効化しているからではないだろうか。

「・・・君・・・アルク君？聞いたのかの？アルク君や〜？」

どうやら呼ばれていたらしい。卒業式の日にも言われたのにこの癖だけは直らない・・・まあ話の最中に考え事をしなければいいのであるが、気になるとどうしても考えてしまっただ。

俺がこんな状況になるとネギはいつもの通りにあわあわした様子でこちらを見るのだが、このかとアスナはそんな俺の悪癖など知らず不思議そうな顔をしていた。

「申し訳ないぬら・・・学園長。もう一度伺ってもよろしいでしょうか？」

思わずぬらりひょんと言いかけてしまった・・・今度から気をつけよう。

しかし、どう見てもぬらりひょんにしか見えなくなってるんだが・・・ぬらりひょん見たことないのに。

『ぬらりひょん』のニュアンスと学園長の雰囲気でそんな気になっってしまうのだから仕方がない。

「う、うむ・・・ネギ君にも言ったが、アルク君・・・この修行は

おそらく大変じゃ。ダメだったら故郷に帰らねばならんし二度とチヤンスもないがその覚悟はあるかの？」

若干戸惑い気味に覚悟を訊ねられたが、元氣良く返事をしておくことにする。

「はい、やらせて戴きます！」

「・・・うむわかった！では今日から早速やつてもらおうかの？指導教員のしずな先生を紹介しよう・・・しずな君」

「はい」

呼ばれた女性教員の胸の谷間に顔を埋めるネギがいた。

「あら、ごめんなさい。よろしくねネギ君、アルク君」

「あ、はい・・・」

「よろしく願います、しずな先生。あとネギはさっさと退きなさい。失礼ですよ？」

「う、うん。ごめんなさいしずな先生。」

やはり、こういった事に関しては聞き入れてくれる・・・魔法関係についてはどうすればよいのだろうか。

「わからないことがあったら彼女に聞くといい。そうそう、もう一つ・・・このか、アスナちゃんしばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？アルク君は放課後にまたここに着とくれ。そ

の時に話すからの・・・」

そんな『ぬらりひょん』の言葉に

「げ」

「え”・・・」

「ええよ」

「ええ、わかりました。学園長。」

上からアスナ、ネギ、このか、俺の順で答えた。

「もうっそんな何から何まで学園長ーっ！」

「かわえーよこの子」

「ガキはキライなんだってば！」

「仲良くしなさい」

学園長のその一言で場は治まり、俺たちが担当する2・Aの教室へと向かうことになったのである。

ちなみに俺が担任で、ネギが担任補佐をすることになっている。

この采配は魔法学校の成績から鑑みて、魔法使いとして優秀になるであろうネギに魔法使いとしての修行の時間が多く取れるようにするための手段の一つであると考えられる。

こうなる事を予想して、ネギの得意属性魔法を実技で用いて評価を下げておいたのである。

英雄信仰の蔓延る魔法世界の膝元のようなものである魔法学校では回復呪文についても授業はしていたが、派手な攻撃魔法を教えたがる先生や、知りたがる生徒が多かった。

こういった武断主義的な人物が多い中で実技のテストをすればどういった結果になるであろうか？

答えはネギのような制御が多少甘くても、派手で威力も高い魔法を使える生徒ほど評価が高くなるのである。

では、得意属性でもない魔法を使っていた俺はどうなるかというと、他の生徒に比べれば遥かに高い水準の魔法を行使することができるが、ネギと同じ魔法で制御もそれほど出来ていないし威力も低いのでネギの次の成績になるのである。

魔法学校の先生の目は節穴か？と言う人もいるかもしれないが、どう考えても節穴である。

むしろ、これほど節穴でなければ俺の使った魔法が得意属性ではないことに気付かれてしまっていたかもしれない。

そのおかげで、この結果を得られたのは上々であろう。

「ねえ・・・アルク？僕のほうが成績いいのに、どうして担任補佐なのかな？」

「ネギと私の座学は同じくらいだったろう？それでいて実技はネギの方が優秀だった、それなら実技の練習も多く取れるように仕事の少ない役割をくれたのかもしれないよ？」

「そうなんだ・・・そうしたら、アルクはあんまりまひ・・・練習できないってことなの？」

「そうかもしれないね。」

そう返してやると、何故か嬉しそうにしていた。

大方、『立派な魔法使い』に早く近づける等と考えているのであるうが、それは定かではなかった。

ちなみに、この会話を聞いたアスナとこのかはネギの方が成績が優秀であるということに驚いていたため、ネギが言い出しかけたまひ・・・という言葉には気づいていそうになかったのである。



## 2 歩目〱日本・麻帆良学園都市・麻帆良中等部を歩く〱（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

1 歩目のように書けているか不安です。

会話についてもコピペが多すぎるので、ネギのいない時のオリジナルストーリー時になんとか出来ればいいかな？と思っています。

### 設定小話2 タイトルの由来

最初は『英雄の息子達』〱双子の兄でもネギじゃない〱というタイトルでしたが、主人公の名前がアルクになったことと、転生した主人公が『魔法先生ネギま！』のストーリーの流れに沿いながら、話を進めて行くことから、道ストーリーを歩く（進める）と言う意味合いを掛けて『双子の兄が歩く道〱ネギま！〱』というタイトルにしました。要するにギャグです。

寒い・・・

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6336z/>

---

双子の兄が歩く道～ネギま！～

2011年12月21日17時49分発行